
マジックイガム！

nikko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックイガム！

【Nコード】

N12790

【作者名】

nikko

【あらすじ】

どこにでもいるような高校生の矢野殿也。魔法なんてオカルト的な類は全く信じない。しかし、試験目前のある日、突然目の前に自称魔法少女が現れて・・・？

出会い（前書き）

初投稿作品です。

楽しく読んでいただければ幸いです。

出会い

「はぁ・・・」

直前の十字路で友人と別れた後、俺は帰路を踏み締めながら一つ溜息を吐いた。

溜息の理由は勿論、試験がもう二日と目前に迫っているからだ。俺の勉強法は毎回一夜漬け。当然試験勉強に励んでいる筈もない。今夜迎える勉強地獄の事を考えると、憂鬱になるのが人間の性つてもんだ。

きつとこの時期の帰宅と、閻魔の判決を待つ極悪人の気持ちは一緒だろう。

今日ばかりは家に着くのは勘弁願いたかったが、神様はその願いを踏み躪ったようで既に俺の目の前には普段から見慣れている自宅の玄関があった。

「これからゲーセンにでも行こうかな・・・」

そんな悪魔からの囁きを振り払い、俺は勇敢にドアノブに手を掛けた。しかし――

ガチャガチャ

鍵が掛かっていた。

「鍵か・・・」

そういえば、今朝母親が「今日はお友達と温泉旅行でお泊まりだから」とか言っていた。

本来なら鬼の居ぬ間に洗濯の如く、誰もいない家で伸び伸びと生活するのだが・・・。

俺は落胆しつつ鞆に入れてある筈はずだった鍵を探した。
そう。筈はずだったのである。

不幸な事に、鞆にあるべき鍵はそこになかった。
確かに俺は家に着くのは勘弁だとは言ったが、家に入りたくなかった訳ではない。俺の事を見守っていてくれる神様は、読解力がないかただ単に意地悪かのどちらかのようだ。

「仕方がない。来た道を戻るか」

いつまでも実在するかも怪しい存在に悪態を吐いても時間を浪費するだけだ。俺は鍵を探しに行く為に、その場を離れようと踵かかとを返した。

――刹那せつな、俺の目を強烈な光が襲った。

「!？」

何が起こったのか理解できなかった。いや、あまりにも不意打ちで、理解よりも防衛本能が先に働いたのだ。俺は、ここで死ぬのかもしれないと。

しかし、強い光は一向に止まやなかったが、痛みが襲ってくる事はなかった。

目を瞑つぶっているので目の前で起きている出来事を確認することできないが、時間が経ても経ても状況は何も変わらなかった。命に危険がある訳ではなさそうに思えた。

俺は安心からか「試験勉強いっできるんだろっ」と暢のんき気な事を考え始めていた。

それから10秒程経っただろうか。目を覆っていた光は徐々に収まり、目に自由が利くようになってきた。

俺は逸いち早く自分の置かれた状況を理解したかったが、再来するかもしれない光を警戒して恐る恐る目を開けた。

最初に目に飛び込んできたのは、どこぞの魔法少女のような派手

な服を纏^{まと}った、人型のそれであつた。

それは、俺より一つ頭ほど背の低い、俺と同年代くらいの少女だつた。

「え!？」

視覚をもつて状況の理解を試みたが、失敗。尚更^{なおさら}混乱する結果となつた。

その少女は、さっきまで辺りを目を開けられないほど照らしていた光に驚いている風もなく、衝撃で固まっている俺の顔をじつと見つめてこう言つた。

「派手に登場しようと思つたんだけど、ちょっとやり過ぎちゃったね」

この子が何を言っているのか分からない。

まさかこの子は、鍵を失くして困っている俺を見兼ねて、さらに登場にインパクトを出そうと強力な発光機器を懐^{ふところ}から取り出したとしても言つのだらうか。

「あ、ちなみに今の光は魔法で出したんだよ」

予想より一万尺くらい上をいつていた。

何と彼女は自称魔法少女なのだという。しかし今のご時世口で言われただけで魔法使いなどという存在を簡単に認めるわけもない。

確かに今の光は多少不可解ではあつたが、それでも過度な演出が好みのコスプレイヤーという方がまだ現実的だと思う。

俺の反応で信用されていないことを感づいたのか、少女はムスツとした表情で挑発的に言つた。

「そうだ。私が魔法少女だという証拠として、君の願い事を叶えてあげる。条件はあるけどね」

一瞬、願いが叶うという大歓迎な台詞が耳に届いたが（勿論信用はしていないが）、嫌な予感が沸々と漂うある言葉も耳に残った。

『条件はあるけどね』

条件。条件とは大抵の場合、相手に相応、或いはそれ以上の対価が見込まれる。

特に今回は相手の一方的な条件である為、どんな無理難題を吹っ掛けられても不思議ではない。

俺の願い事が叶う以上の対価って・・・一体何だ？まさか「お命頂戴致します」なんて言わないだろうな・・・？

「条件って何だ？」

俺は少し緊張した面持ちで相手の返答を待つ。

ところが少女は俺とは正反対に気の抜けたような表情であっさり
とこう言い切った。

「うん、回文だね」

何でこの少女はいつも俺の予想の斜め上を的確に狙えるのだろう。
というか未だによく意味が理解できない。回文？回文って確か・・・。

「上から読んでも下から読んでも同じ文の事だよな？トマトとか」
「トマトだね。はい！」

少女が手を振り翳すと、何もなかった筈の空中に光が煌めいた。
一応さっきので学習したのか光は淡く、今度は目でしっかりと確

認できた。数秒後、光は次第に消えていき、そこには少女の言った通り真っ赤に熟したトマトが現れていた。

「へー、結構手品うまいんだな」

それでもオカルトの類を全く信じない俺には通じない。

「あれ、まだ信じてないの？君、意外と頑固だね」

確かに演出は良かったがまだ信じるほどではない。

派手な演出でトリックを誤魔化す手品なんて山ほどあるし、そもそも回文なんて条件をわざわざ自分から出したんだ、トマトくらい用意してるに決まってる。

よし、今度は小手先の技では到底不可能な願いをして、この自称魔法少女の化けの皮を剥がしてやろうじゃないか。

「じゃあ、俺家に入れなくて困ってるから、玄関の鍵を開けてくれないか？」

普通は鍵なしで錠を開けるなんて、ピッキング行為以外の何物でもない。だが、もし本当に魔法とやらが使えるのならこれくらいは朝飯前だろう。

「別にいいけど、願いは回文でないとダメだよ？」
そういえばそうだった。

今思えば条件が回文なのは、無理な願いをされるのを防ぐためなのではないだろうか。なぜなら願いが複雑になればなるほど回文は作り難くなるからだ。

どうせ、回文に慣れてない人はトマトや新聞紙辺りしか出ないと高を括っているのだろう。それならば、意地でも鍵を開けてもらえる回文を考えようじゃないか。

回文ってのは逆さから読んでも同じになる文の事。つまり「鍵」を回文に含むのなら、その反対の「ぎか」という言葉も同時に含ま

なければならない。いや、「鍵」を回文の中心に置くと仮定すれば「かぎか」か「ぎかぎ」にもなる。問題はどうか考えれば回文完成への近道なのかだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

悔しいが、いくら考えてもうまい回文が思いつかない。やはり「鍵を開ける」のような体言と動詞の両方の要素を含む回文は、少なくとも簡単にはできないようだ。

こうなったら発想を変えるしかない。本当に魔法ならば鍵を開けずに家の中にだって入れるだろう。俺は自分の部屋にさえ行ければいいんだ。自分の部屋へ・・・そう。

「部屋へ！」

どうだ。これなら流れから考えても家の中へ連れていってくれるだろう。勿論、魔法があるならの話だが。

「部屋って、どこの部屋に行けばいいの？できればそこも言ってほしいな」

少女は案の定とばけてきた。やはり魔法などないんだ。だが・・・

「My部屋へ！今！」
まいへやへいま

その先も考えてある。

「へえ、君凄いな！Myは思いつかなかったし、おまけに時間指定までされるなんて」

「今すぐだ。早く連れていってくれよ」

これでもう逃げられないはずだ。いや、むしろ逃げ出すんじゃない

いだろうか。

もしかしたら俺を気絶させてから部屋に運んで、魔法で連れてきたと言ひ張るかもしれない。

「じゃあ、あなたの部屋に連れて行ってあげるね。それ！」

念のため、俺は身構えた。おかしい行動の予備動作や、何かの違和を感じるために。

少女はさっきのように手を真上に向かって翳^{かざ}し、辺りは再び淡い光で満たされた。

俺は何としてもトリックを見つけ出そうと、さらに集中して少女を睨みつける。

すると、俺はある違和感を感じた。

違和感を感じるのも無理はない。なぜなら見つめていた少女の後方が、いつの間にか見慣れた俺の部屋になっていたのだから。

「!？」

俺は慌てて周りを見回した。見間違うはずはない。そこはどう考えても紛れもない俺の部屋だった。

「・・・一体どういう事だ」

「だから、魔法だってば。まだ信じてないの？」

少女はそう言いながらも笑みを浮かべていた。これで魔法を信じたと確信しているのだろう。

事実、俺は信じ始めていた。いや、信じるしかなかったのだ。

理屈でオカルトを信じない人は、いざ目の当たりにして理屈を覆されると反動で狂信的になってしまいがちだが、そういう次元ではない。手品で簡単に密室を出入りするなんて、どんな有名な推理小説家もお手上げだろう。

するとここで俺は気づいた。自分が今土足で部屋にいることに。

「うわあ！」

俺は慌てて靴を脱ぎ捨てた。そして少女も土足ではないかという考えに行き着いたので、バツと少女の足元を見ようとしたが、俺の目は少女の足を一瞬捉えることができなかった。なんと少女は浮いていたのである。

もうここまで見て信じられなかったらただの意地っ張りだろう。

「分かったよ。魔法はあるんだ」

「分かればよろしい」

少女はまさに得意満面といった表情で笑った。

「あ、私の名前はイガム。よろしくね」

「俺の名前は矢野^{やの}殿^{との}也^やだ」

これが、俺と少女イガムの出会い、そしてこれからのドタバタ生活の始まりだった。

出会い（後書き）

この次から学校を中心にドタバタ劇を繰り広げる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1279o/>

マジックイガム！

2010年10月10日06時43分発行